先頭に立つて闘う
解雇拒否者の前進同盟

〝去るも地獄、残るも地獄〟私たちの後うには、いま大きな口をポッカリあけた地獄への穴があけられた。一歩でも後退したら、地獄の穴へ吸いこまれてしまうのだ。前へ進む以外に道はない三川支部前進同盟は、この危急のときにあつて、かつてあの一一三日闘争では首切り状をつきつけられたにがい経験もあり、こんどの闘いこそ、われわれが先頭になつて闘うのだと、全員一致して決議し、闘いに立上つた。

クビ切りをハネ返せ

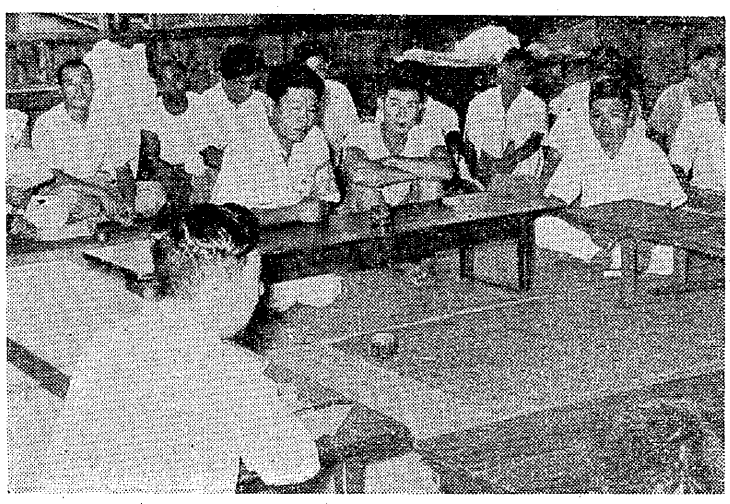
企業合理化絶対反対総決起大会は九月六日、大地評、荒地評の組合員、主婦約四万が集つて、闘いに固いスクラムを組んで立上ることを誓いあつた。

この大会後、午後二時半から、三川支部前進同盟では支部事務所二階で緊急総会をひらいた。

前進同盟とは、あの一一三日闘争で勧告拒否をおこない、闘い抜き職場復帰した人たちの間でつくられた会であり、現在四十八名。足を踏まれたものでないとその痛さはわからない。前進同盟の人たちは、忘れもしない六年前の八月六日、会社からの首切り状を手にした人たちである。

この日総会は組織代表から「六年前の状態がふたたび起つてきました。中央で、いま行つている団交が決裂したあかつきには、必ず首切りが出てくるものと予想されます。

この前は、職場活動家、主婦会結成に奔走した人たちが、いずれも勧告状をうけ、このことが組合員の怒りを買つて、あのような激しい闘いになりました。こんどは会社も、前回よりもつと上手な手で出てくることは必定です。あの人なら仕方がないというようなことを、他の組合員が若し抱けば大変なことになります。会社もこれをねらつているでしょう。


苦渋の思い出を胸に決意を語る前進同盟の人々

そういうことを私たちは見抜き、さいごまで闘かわなければならないと思います。かつての拒否者である私たちは、全組合員の先頭にたつて、職場や地域で果敢な闘いをすすめなければなりません。闘つて行く上でこんごのあり方について審議したいと思います」と挨拶ののち、討議に入りました。

いろいろ意見が出たうちで三鉱労組の組合員たちはあくまでも三鉱労組の組合員であり、日常つねに組合員の先頭に立つて闘つているので別な行動などありえない」などが出ましたが、矢張り首切り状を受けた体験をもち、闘いの中で人知れぬ不安や淋しさなど当の本人でないとわからない。こんご、闘いの推移では、指命解雇も出ることが予想される、そういうときは、私たちが率先して出かけ、本人を励まし、体験を語ることも必要だ。

など各意見が出され「前進同盟は結成時の合言葉となつている全組合員の前衛となる。だから、三鉱労組の組合員としての自覚をもつているから、前進同盟としての別行動をとる必要はないが、闘争の推移によつて闘争委員長から、前進同盟としての独自の行動が要請された場合は、これにしたがう」ということが決議され、こんごは全組合員の先頭となつて闘うことを再確認して闘いに立上つた。

〝なぜ首切るか〟
坑長室へ〝お早う〟デモ（山四）

四山支部では九日朝八時から一斉に〝お早うデモ〟の行動にうつつた。

坑長室にデモをかけ、入坑前の組合員たちは口々に「坑長さん！、私は一カ月一万八千円が稼ぎ高です。会社は給料は半分しか支払わないといいますが、これでは食べられません」「坑長さん貴方も血の通つている人間なら、何とかして下さい。私たちには妻子があるように、貴方にもあるでしょう。私たちが分からぬことはないはずです……と口々に坑長に生活の苦しい状態を訴えたり、会社の一方的なやり方に不満の意を表したりして回答を迫つたが、坑長は終始一言もしやべらぬ全く人を小馬鹿にした態度でのぞんでおり、組合員の新たな怒りを買つていた。

この〝お早うデモ〟はこの日を皮切りに連日行われるし、また一番方昇坑後と二番方入坑前には、同様坑長室に〝今日デモ〟をかける四山支部では、こういう事態に突入した今日、行動を起こすことが、まず何より必要だということで、そのためには、結論を出すというわけではないが、「なぜ首を切るか」「どうして賃金を払わんか」と追及に立上つたわけである。

「何故首を切る」と詰よつた四山の同志たち

繰込場で激励
共闘に立上つた荒地評

九月八日、荒地評各単産の執行委員は、四山鉱繰込場で、一番方を激励するとともに、完全なる共闘態勢をもつて敵の意図している企業合理化、安保条約改定を粉砕しぬこうとメッセージをおくつた。

なお、この日はちようど指令百号にもとずく統一行動の日でもあり各番方とも繰込場で、職場大会を行つたが、荒地評の執行委員は二番方繰込のときも、繰込場で激励をおこなつた。

荒地評では、炭労の企業合理化反対闘争に全面的な共闘態勢を決定しているが、いま政府は安保改定について国民の前に正面立つてはなかなか実施されない情勢に追いやられてきた。国民の目を欺くことはできないから、三井の闘いに目を向けさせて、安保改定を強行しようという陰謀があり、これを地評としては見破つて、三池の闘いは荒地評全単産の問題として発展させることに立上つた。

この日、職場大会の中で決意を示すとともに、さらに幅のひろがりと強固な団結の力で、敵の意図を打破つて行こうと誓い合つた。

なお、四山支部では、三池の今回の首切り闘争をより深く理解してもらうために、この日市教組、国鉄、交通の各労組へ、オルグを派遣した。

まず基本から
熱心にガリ版講習会

四山支部では七日から約一週間の予定でプリント講習会をひらいている。

講師として港務支部からこの道のベテラン村岡書記を招いて、午後五時から連日約二時間半おこなつている。

闘いが熾烈になつてくるにつれて各地域分会では、情報を刷つたり連絡、または文化活動の一環としてガリ版の必要にせまられており、この機会にガリ版の基本的な知識や技術をマスターしておこうというものである。

会場には主婦も、年のいつた人たちも入りまじつて熱心に講習をうけており、早くてきれいなプリントを仕上げるためには、どうしたらよいかと、仕事で疲れた体をいといもせず、頑張つている。

ぞくぞくと激励電報

三鉱労組を主軸とする今次企闘については、その全国労働運動に及ぼす重要さが認識され、去る九日には大地評、荒地評傘下四万の組織労働者を叫合して反対決起大会を催すなど熱烈なる支援態勢が組まれつつあるが、当地の情勢の推移に深い関心を寄せ在京の革新政治人や友誼団体からも続々と激励の電報が到着、徹底的に白紙撤回をかちとろうとする三鉱本部の猛闘士たちを一層奮いたたさせている。

不当なる第二次合理化案絶対反対自信と信念を以つて統一闘争を組み、勝利の日まで共に闘い抜こう

参議員　阿具根　登
〃　阿部　竹松

日米独占資本の支援の下に今回会社が提示した、第二次合理案に対して組合及び主婦会が徹底的に闘い抜かれることを期待し、わが党が全力を挙げて協力することを誓う。

衆議員　田中　稔男

合理化をハネ返す三池労働者の先進的役割を期待する。

社会党本部

闘う労組の決起大会を祝しわれらも

ともに最後の勝利の日まで闘い抜くことを誓う。

三井田川労組

団結強く生活権確保のため闘いの勝利祈る。

参議員　内村

最後まで共に闘かおう。

熊本電話局職場大会

最後まで頑張れ

吾等共に闘かおう。

全逓郵政支部職場大会

首切りをハネ返し最後まで闘え、吾等も共に闘かわん。

熊本電報局職場大会

勝利の日まで共に闘かわん。

全電通八代分会

憂うつの極まりなき会社の防ぎよに対し決然として闘う三池の仲間に心から敬意を表す。

坂本　泰良

企業整備の美名のもとに首切りを実施し失業の憂目をみせ、社会不安を来す三井資本の不当な弾圧に対し異常な激怒を感ずる。

この敵を退治して労働者の基本権を確立するまで戦い、戦い抜かれることを希求す。

荒尾二小職場会

地方色を背景に愛慾と物慾描く仏伊合作映画
「掟」

（仏・伊合作）「裸の町」を監督したジュールス・ダッシンは、資本主義のアメリカを嫌つて欧州にとび、「街の野獣」「男の争い」「情命」などの佳作をつくつたが、この「掟」は彼の最新作で仏伊合作である。

イタリアのコルシカ島の町の風土と自然を背景に、そこに住む人間を描いたドラマである。主演はイブ・モンタン、ジーナ・ロロブリジダ、マルチエロ・マストロヤンニである。

コルシカ島の海岸町。ここは、いまだに地主制があり、昔ながらの〝おきて遊び〟がのさばつている。カケに負けた者は親のいいなり放題になつていじめられるという残酷な遊び。この町の実権者は金持のピエール・プラツスールと秘密結社の首領イブ・モンタンだひげをはやしたモンタンは町一番の美人で愚連隊のあねごジーナ・ロロブリジダをねらつている。

彼女を女中にやといたいと申込む美男の農業技師マルチエロ・マストロヤンニ、モンタンの一人息子ラフ・マツテイオーリに夢中になる女盛りの人妻メリネ・メルクーリ、それに大金窃盗事件など、愛慾と物慾のかつとうを強烈な地方色をバツクとして波乱万丈にくりひろげる。

挑発的な娘が危つかしい橋を渡つてハラハラさせながら無事に身を守るというあたりがロロブリジダとしてはみどころ。舞さでジメジメするような海辺の町の空気日常茶飯事のように行なわれる情事など、風変わりな環境や辺境の風俗に心をひかれるところが多いモンタンのギヤング役に独特の持味がある。（十六日よりセントラルで）

主婦の戦争体験記
「空の色（だいだい）橙」
金鉱主婦協編
書評

婦人たちの間で、苦しかつた戦争体験をつづろうという気運が大きくなつている。さきごろ鶴見和子編「ひき裂かれて」が反響をよんだが、これは金属鉱山労組の主婦たちの手記ほぼ百編を集めたもの。文章は短いものが多いが、内容は街や村で受けた空襲、ひき裂かれた母と子や夫婦、女子てい身隊、食糧難、サイパンや満州での混乱期の苦しみなど、国中が受けた戦争の苦難のさまざまな分野にわたつており、いずれも、あの苦しみは二度とくりかえしたくない、戦争はもう絶対反対だと強く訴えている。

この本には、エンピツをにぎりつけない労働者の主婦たちが、戦争体験をつづることによつて過去を見つめなおし、そこから現在の自分の生き方をきめようとする態度が示されている。すばらしいことだ。

ある主婦は、小学生の「そんなに悪い戦争を、なぜみんなで力をあわせて、しないようにできないの」ということばに「ハツ」とし、「そう、みんなが力をあわせて、私たちの生活を破壊しようとするものと闘うことだ。盲信することなく、批判しなければ」といつている。「ハツ」としたこの驚きが過去の体験をいまの時点から再検討する出発点となつている。

この本に集められた〝個人〟の体験が〝民族〟の体験にまで高められ、戦後十四年のそれと合わさつてしつかりふまえられたとき、あの苦しみを絶対にくりかえさないための確固とした思想と行動がうみ出されるだろう。